モノローグ

大学生のひとりごと

19歳から見た
25歳は大人に見えたけど
なってみるとそうでもない

私の大切な言葉

二〇一七年一月、私は成人式の二次会にいた。

当時の私は調子に乗っていた。「いい大学と彼氏を地元のもんに自慢したい！」そんな考えが顔に浮かんでいただろう。クラスメイトと次々とお酒を酌み交わし、私は羽田のとこへ向かった。彼は三年生のときのクラスメイトだった。

「おつかれさん!! 乾杯しよう！」

「ごめん！ 俺警察官だからさ、上司に飲むなって言われてるんだよね。」

あっ。もう羽田は社会人なのか。

飲み会で騒ぐのが当たり前になっていた自分が恥ずかしかった。大学へ行くのは当たり前じゃない。酒でどんちゃん騒ぎできるのも当たり前じゃない。責任と引き換えに大学生になったんだ。

「そっか！ 大変だね。」

これしか言えなかった。

あれからもう少しで五年になる。昨年羽田は結婚した。ラインのアイコンが結婚式の様子になっていた。結婚・出産した同級生の噂も時々耳にするようになった。私はまだ大学生。勉強できる時間が長く与えられたから、責任を勉強で果たしていきたい。

ショートショート　たこ焼き

最近、肩こりが辛い。三六五日たこ焼きをひっくり返し続けているのだから無理もない話だ。むしろ肩こりの程度ですんでいるのは幸運というほかないだろう。隣の梅野さんはもう腕が上がらないようだし、はす向かいの大山さんに至ってはもはや右腕を切断するほかないらしい。それでもたこ焼きを作るほかない。

三年前の税と社会保障とたこ焼きの一体改革によって、われわれの生活は一変した。通貨はたこ焼き本位制となり、国民全員に国民たこ焼き手帳が配布された。俗に言うたこ焼き革命である。国民全員にたこ焼きが義務化されたのだ。制度施行前後にはいくつもの問題が起こったが、たこ焼き機の買い占めには政府がたこ焼き機を製造し、蛸の不足に対してはどこからか大量のカット済み「タコ」を調達してきて配給することで対処した。

こんな狂った世界にあってなぜ人々が従わざるを得ないかと言えば、それはたこ焼きのせいである。といってもたこ焼きが美味しいからとか楽しいからでは断じてない。たこ焼きの味は作り手の心を明確に反映するからである。もし私に政府に対する良からぬ思想があるのなら、それはたこ焼きの味として表れる。われわれ素人にも簡単に差がわかる程度に味が違うのだから、政府のたこ焼き調査員からすればどんな思想を持っているのか手にとるようにわかるのだろう。先週愚痴を言っていた近本はもうたこ焼き収容所送りになってしまった。まったくたこ焼き秘密警察は恐ろしい。

ところで、たこ焼き収容所には出口がないという噂を耳にした。たしかに、身近に捕まった人は数多くいるけれど出てきた人は一人もいない。しかし出てくる人がいなければ、今頃たこ焼き収容所はパンクしてしまうだろう。仮に殺してしまっているとしたって大量の死体をどうするというのだろうか。こんな簡単なことにも説明がつかないようじゃ陰謀論として失格だ。

『努力は必ず報われる。もし報われない努力があるのならば、それはまだ努力と呼べない』

王貞治

受験生だった去年、何としても早稲田大学に入学したかった僕は、より洗練された学びの場を求め地元である大阪を離れ、東京で浪人生活を送った。親元を離れたことで、誰かから「勉強しなさい」と発破をかけられることがなくなった。そのような環境に初めは「自分のペースでのびのび勉強できる」と喜んでいたが、時が経つにつれ自分に対し甘くなり勉強に支障をきたした。「このままではあかん！」と思った僕は、白紙に自分を叱咤激励する言葉を書いて壁一面に貼ることにした。その時に出会ったのがこの名言である。壁紙効果もあってか何とか受験を乗り切れたわけだが、一つ問題がある。僕は根っからの阪神ファンだ。そして、王貞治と言えば宿敵巨人の大英雄である。少し複雑な気持ちはあるが、ある道を極めた人間の言葉には心に響く何かがあると感心し、「喝！」ではなく「敵ながらあっぱれ！」と心から思った。

『自分に似合う、自分を引き立てるセーターや口紅を選ぶように、ことばも選んでみたらどうだろう』

向田邦子

実はエッセイと短編小説で特に好きなのが向田邦子。彼女の魅力は温かい筆致とその底にあるちょっぴりの悲しみ。ラフという言葉の似合う人で、肩の力が入っていない。それが女性として、どうにもカッコ良い。

言葉もアクセサリーだと思って選んだら、下手なことは言えない。それにアクセサリーだと思ってしまうと、他人の言葉に惑わされなくなる。あの人、ずいぶんイカツイアクセサリーつけてんな、と思うくらい。結局、言葉も自己表現の手段に過ぎない。ゴテゴテ重ねても大切なことは伝わらないかもしれない。だからこそ、とっておきの言葉を使いたい。

故人を蘇らせられるなら、迷わず向田邦子と会いたい。日当たりの良いベンチで並んでオレンジジュースでも飲んでおしゃべりしてみたい。彼女なら、優柔不断で心配性の私を笑い飛ばしてくれるような気がする。

『人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見ればコメディだ。』

チャールズ・チャップリン

喜劇王チャップリンの言葉。なにか悲しいことがあった時にこの言葉を思い出せば、どうでも良くなる。どうせ何十年後に死ぬときには笑いながら喋ることになるのだから、立ち直った方がはやいって思わせてくれる。とってもつらい思いをしていたはずの受験期のことも、予備校でバイトするようになった今では生徒達の前で笑い話にしながらアドバイスする。いったん涙を流し終えたら上向きゃいいことある、そんなことを教えてくれている気がする。自分が自分の人生をやり直したいと思った事がないのは、この言葉に通ずる何かがあったのかもしれない。自分にとっても他の人にとっても、自分の人生が喜劇になるように過ごしていきたい。

私の高校時代〜それはラブハンター〜

私の高校時代で最も印象に残っているのは、高校一年生の文化祭である。私の高校は中高一貫の女子校で、高校生には「喫茶」「演劇」「ゲーム（お化け屋敷など）」の三つの選択肢が与えられる。一番の人気は「喫茶」である。パフェだの、クレープだのを売ってつまみ食いできるからだろう。七クラスあるうち、六クラスは「喫茶」を希望した。私のクラスも「喫茶」を希望し、「団子を売る」と申告した。しかし「のどに詰まるといけないから」と却下され、半ば強制的に「演劇」を押し付けられてしまった。中二の頃のように、鬱屈した何かを持て余している年頃ならまだしも、高校生になってまで演劇をするというのは、演劇部員のいない私のクラスにとって屈辱的なことであった。半ば投げやりに、アンケート形式で劇の内容を決めたのだが、いかんせん皆やる気がない。私もどうでもよくなって「ラブハンター」とひとつ、汚い字で書いて提出した。

運命とは不思議なものである。どういうわけか、私の書いた「ラブハンター」が選ばれた。必然的に私が脚本を書かねばならなくなったのだ。クラスでさほど目立つタイプではなかった私が「ラブハンター」を掲げ、プロデューサーのような立ち位置で脚本から演技指導までしなければならなくなったのである。皆「喫茶」ができなくなって、むしゃくしゃしていた。「むしゃくしゃしてやった」という感じの劇だった。

劇の内容は恥ずかしすぎて、半分以上は忘却の彼方。たしか、技術の進歩によって「愛」が可視化される世界になった。恋人たちは「愛」と書かれた段ボールの切れ端を大切に温める。しかし、可視化されたことで「愛」は盗まれるようになってしまった。「ラブハンター」たちの仕業である。「ラブハンター」は良質な「愛」を盗み、売りさばく。「愛」は買える時代になってしまったのである……といった感じで、「愛」憎劇が繰り広げられるのだが、最終的に人々は「愛は見えなくていい」という結論を下す。要は、まあ「大切なものは目に見えないけれど、それでいい」というメッセージなのであった。

案外この劇は盛況に終わった。ヒーロー役をバスケ部のイケメン女子が演じたことで人気は爆発。なぜかリピートしてくれる友人もいた。人員不足で私も出演しなくてはならず、「占い師役」として出演した。脚本担当の権力で、セリフを短く覚えやすいものにしたことは覚えている。（最低！）

投げやりな脚本のもとで始まった文化祭も無事に終わり、クラスの団結力はミミズ一匹分くらい高まった。しかし、どういうわけか皆、あの劇の詳細なストーリーを覚えていないのだ。脚本を書いた私でさえこの程度しか覚えていない。二ヵ月もの間、私たちは何を真剣に演じていたのだろう。あれはひと夏の幻だったのかしらん。きっとあの文化祭も「ラブハンター」に盗まれてしまったのだ。

とん、と

空席をさがして後ろを見やると、直樹の顔が目にはいった。窓からさしこむ夕陽をうけて、短髪が黄金に輝いてみえる。

「あ」

「あ」

直樹が先に言ったので、私はいそいで復唱した。気づかないフリをして、身体のむきを変えかけたときだった。だから、身体がへんに右往左往して、不自然な感じになってしまった。不自然な感じを悟られまいと、私はとっさに手を振った。その手首には、レジ袋がかけてあって、振った手の甲とこすれた。痛いな。そう思ったけれど、無理して振りつづけた。

バスが、「ぺー」と鼻を鳴らす。それからしゅうと吐息を吐いて、ドアが閉まった。

「お席、後ろ空いてますよ」

運転士が、マイク越しに言う。

私のことだ。

私は所在なく、あちこちを見まわした。「後ろ空いてますよ」と言われているのに、前後左右を見まわした。後ろを見ると、直樹が手をあげていた。直樹の隣が、ぽっかりと空いている。私は、身を小さくして、直樹の隣に身体をおさめた。

直樹の隣に腰をかけると、直樹は小さく身じろぎした。二人のスペースは十分にあるのに、少しだけ窓の方につめたのだ。二人の間に、妙な隙間がうまれる。

窓の方に寄った直樹の横顔を、私は見つめた。直樹をつつむ陽の光のなかに、小さな埃が浮いている。チンダル現象だ。

「え？」

直樹が、こちらに視線を向けた。声に出ていたらしい。私はびっくりして、あわあわする。

「これ、この、埃が浮いてみえるの。チンダル現象って言うらしいよ」

「へえ、そうなんだ」

直樹は、笑みを浮かべ、どうってことない返事をよこす。そうかそうか、チンダルか。口の中で反芻しながら、舞っている埃に手を触れた。

「そう。うん、チンダル」

私は髪をかきあげた。なんてつまらない話をしてしまったのだろう。

顔が熱くなる。熱くなったので、頬が赤くなっているのではと疑う。赤くなっているのを直樹に気づかれたらと思うと、さらに顔は熱を帯びた。

バスは、ちまちまと動いている。この国道はいつも大渋滞だ。中には痺れを切らして、途中で降りて歩きはじめる乗客もいる。

「高校、どう？」

直樹がきいた。

「ふつう、かな。そっちは？」

「うん。俺も、ふつう、かな」

「そっか。そうだよね。あんま中学と」

「変わらない」「変わらない」

声が重なる。おかしくて、二人はくすりと笑った。

とん、と膝に何かが当たった。驚いて、直樹から膝を遠ざける。目で見なくても、何が当たったのか、すぐにわかった。

私は一度引いた足を、また少しだけ直樹の方に寄せた。そして、ふたたび膝にとん、と硬いけどやわらかい感触を感じた。今度は当たったまま、くっついた。ほんとうは「くっつけた」と言った方が正確なのだろうが、二人の膝頭は、微小な磁力を帯びたように、くっついたのだ。頭の中に、水素結合を表す教科書の図が、ふと浮かんだ。

くっついた膝頭から、私は直樹のすべてを感じた。表面積的には、くっついている部分は実に微小だ。けれど私は、直樹の心が、体温が、その接面から、自分の身体にながれ込んでくるのを感じた。

前の方に座っていた乗客が、せわしなく荷物をまとめはじめた。ビニール袋の音が、がさがさと車内に響く。きっと、この渋滞に耐えられなくなったのだろう。私も普段なら「歩き」という選択肢をとるに違いない。

けれど、今日は違った。

私は首を伸ばし、フロントガラス越しに前車両の様子をうかがった。赤いブレーキランプが、光っては消え、光っては消えている。

いいぞ、その調子だ。このままずっと、渋滞が続けばいい。

私は一心に念じながら、点滅する赤い光を、じっと見つめた。